

文学の力で、固定観念を解きほぐせ



チャールズ
R・カベル
文学部助教授

日本の学生に接し、カベル先生は驚いた。テキストや書かれていることをそのまま「正しい」と信じて疑わないこと。さらに、文学が実社会に役立たないとか、社会に背を向けたものと誤解されていること。そんな学生たちに対し、カベル先生は英語を用いた「ミニミニショー」や文学を通して、カルチャースタディーズの重要性を説き、いかに理解を深めてもらうかに心を砕く。日本人とはこうである、男性とは、女性とはこうである、といった固定観念から自分を解放する術を覚えてほしい。

私たちのアイデンティティは常に変化している。単純な定義にとらわれない多様性、複眼的な思考を身につけることで、時の権力者に都合よく作られている歴史や社会構造に対し、問題意識を抱けるからだ。「これまでは、学校とは何かを教えてもらう場所だと思っていたかも知れない。しかし、大学とは学が中で疑問に思ったことをお互いに交わり、意見や視点を磨き、自ら動いて新しい学問と歴史を形成する場所です。カベル先生は文学には「社会を結びなおす力がある」と信じている。

文学には、人種や民族、言語の違い、性別などにより葬られた史実や歴史など何ら記録されることもなかった市井の人々の暮らしが描かれている。小説の構造を考えながら、それを社会の構造に重ねて思いを馳せたとき、周囲や社会を変えようとする力が宿る。文学の可能性を一人でも多くの学生に伝えたい。

世の中に興味を持って、とことん面白がれ



西澤
晃彦
社会学部教授
にしざわ あきひこ

「ふつうはね」「ふつうでしょ」「何気なく発してしまふこのフレーズ、西澤ゼミでは禁句である。今、見えている風景とは別の角度から物事を見ることが社会学の原則であり、普通の風景やものごとなど何一つあり得ないからだ。当たり前前のごとを当たり前前に見るなら、先人の立証や仮説、証明をひっくり返せ」と西澤教授はいつ。好きなテレビ番組や音楽は言いつにあらす、なんとなく見て、聴いて、誘われるままに参加する遊びや趣味の類にさえ理由がある。なぜ自分はそれを見てしまふのか、どこが気になるのか、その理由をとことん追究せよと語る。「自分の興味、関心から目をそらさず、なぜいいと思っのか、なぜ惹かれるのか、自分に問いかけ突き詰めて考えることで自分自身が見えてくる。内なる自分を発見する面白さを味わってほしい。」

その最大のチャンスは卒論だと断言する。「行動半径にいる具体的な人々」を対象に、会って、見て、話を聞く。人と真剣に関わり、人の様々な欲望を実感し、社会の広がりを感じることで自分なりの視点が持てる。そこに見えたものに意義を引き出し、社会的背景を導きだす。だからテーマ選びにこだわり、時間をかけさせる。曖昧なテーマには、畳み掛けるように質問を重ね、突っ込みを入れる。「世の中こんなもの、と思っな。いろいろな人がいて謎の多いこの社会で、ひとに、ものに、現象に関心を持ち続け、その興味を言葉で表現して欲しい。」

目的をはやるな！愛と情熱をかたちにできる知識と技術を身に付けよ



高野
龍昭
ライフデザイン学部講師
たかの たつあき

医療ソーシャルワーカー、またケアマネージャーとして長らく現場に携わった後、教員へと転身。就任早々、介護福祉士や保育士を目指す学生の目的意識の高さに驚いた。それはとても好ましいことである反面、福祉を狭い範囲で捉え過ぎていることが気になった。専門科目や実習には熱心なのに教養科目を軽んじたり、現場に大切なのは愛と熱意とばかりに実践をはやる学生に「その思いを裏付ける知識と技術、価値観を身につけよ」と繰り返し説く。

20人に1人が何らかの障害を持ち、85歳以上の2人に1人が介護サービスを受ける現代。多様な対象者と向き合い、相手の気持ちを理解し、自分の判断を適切な言葉で伝える表現力を養うことは福祉に携わる者には必要不可欠で、人と関わる仕事の基本、と強調する。福祉業界を志すのは弱者へ寄り添う優しい視点を持つ人が多いという。それ故、相談を受けるうちに相手と同化し、自分の心が消耗してしまうこともしばしば起こりうる。「自分の置かれた環境に応じて感情をコントロールするのにも技術のひとつ。いくら他者への愛情や情熱が強くてもそれでは解決には至らない。今は専門だけと固執せず幅広い知識を身につけることのが確かな判断力を養う。勉強に加え、遊びも恋愛も、失恋だって人としての厚みを増してくれるはず」と高野先生。福祉の現場で経験を重ねた自分だからこそ伝えられる、伝えるべき役割があると確信する。